

空き地を活用した多世代ネットワーク形成のためのプログラム「よしひさえん」 その1：食をテーマとしたプログラムの企画と実践

準会員	○梶田美結*1	正会員	重山隼人*2
正会員	藪谷祐介*3	同	有原千尋*4
同	北島陽貴*2	同	今泉優希*5
同	栗原稜*6		

まちづくり アクションリサーチ 多世代交流
重伝建 コミュニティデザイン 低未利用地

1. 研究の背景と目的

富山県高岡市吉久（以下、吉久）は2020年12月に国の重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建）に選定された。歴史的町並みを活かしながら地域住民主体によってまちづくり活動が行われている。一方でまちづくり活動の担い手の高齢化が深刻化しており、今後の持続的なまちづくりに向けて、いかに若者の参加を促すことができるかが喫緊の課題である。また、空き地の増加に伴う景観上・管理上の課題も有するが、道路に面したオープンスペースとしての空き地は、まちづくり活動を実践する上での視認性が高く、多様な使い方を許容できるため、開かれた多世代のネットワーク形成に有効な空間であると考えられる。

近年、コミュニティガーデンがオープンスペースを活用した多世代交流の場として注目されており¹⁾、園芸や野菜販売などの「食」に関する活動が世代を超えたコミュニケーションを促していると考えられる。また、多世代ネットワーク形成においては、園芸活動を中心とする、継続的な世代間交流プログラムの開催²⁾や多種多様なイベントへの参加の重要性が指摘されている³⁾。以上のことから、空き地を活用し、「食」をテーマとした多種多様なイベントを内包するプログラムを継続的に実施することは、多世代ネットワーク形成において有効であると仮説を立てることができる。

そこで本研究では、園芸、調理、飲食、振舞、工作の5つの活動を「食」と定義し、これらに関する多種多様なイベント^{注1)}を継続的に実施するプログラム「よしひさえん」(図1)を試行的に実践する。そして、多世代ネットワーク形成に関する効果を検証することにより、その可能性を明らかにすることを目的とする。

本研究は2編で構成され、本稿では「よしひさえん」の実践について報告し、それにおける観察調査から得られた知見について述べる。

2. 研究対象

対象地域である吉久は、高岡市中心市街地から北東へ約5キロメートル離れた小矢部川と庄川に挟まれた河口



図1 「よしひさえん」のフロー



図2 対象地域

(Google Map を基に筆者作成)



図3 対象敷地

(Google Map を基に筆者作成)

に位置し(図2)、藩政時代に加賀藩の年貢米を収納する御蔵の設置により在郷町として発展し、米の集積地として栄えた地域である⁴⁾。対象敷地は吉久に所在する約80坪の地域住民所有の空き地で、かつての街道である旧放生津往來と万葉線(路面電車)が通る道路をつなぐ住民の生活道に面する(図3)。

3. 研究方法

本研究は調査者自らが、実践を立案し、参加するアクションリサーチ(以下、AR)として実施した。ARとは、クルト・レヴィンが提唱した実践研究の実践的解決のために、厳密に統制された実験研究と現実のフィールドで行われる実地研究とを連結し、相互循環的に推進する研究方法とされる⁵⁾。ARは各イベントの観察調査に加え、該当するイベント終了後に参加者全員に対してアンケート調査(記名式)を行った。2022年6月から2022年11

までの期間でARを5回、アンケート調査を4回実施した。また、「よしひさえん」の全てのイベント終了後、8名を対象にヒアリング調査を行った。アンケートおよびヒアリング調査結果については次稿で報告する。

4. 実践結果

(1) 園芸

園芸では、野菜の苗植えや種まき、収穫などを行った。子ども達は進んで苗を植え、主体的に活動に参加していた。また、野菜作りの経験がある高齢の参加者が子ども達に植え方を教えるなど積極的な交流がみられた(写真1)。このように、園芸は子どもでも参加することができ、かつスキルの伝達に適した多世代交流を生む活動であった。

(2) 調理

調理では、肉や野菜を焼いたり、洗ったりする工程を行った。調理を行いながら周りの参加者と楽しく会話する様子がみられた。二組の親子が役割を分担して調理を行う様子がみられた(写真2)。また、屋台で販売用のスープを温めていたことをきっかけに高齢者と会話することができた。このように、調理は子どもでも参加することができ、かつ会話の誘発に適した多世代交流を生む活動であった。

(3) 飲食

飲食では、バーベキューや焼き芋、出張朝市での料理販売を通して参加者との共食を行った。参加者が持ち寄った料理や、収穫した野菜を使った料理を楽しく会話しながら食べる様子がみられた。共食では多世代が年齢差関係なく楽しめる空間となっていた(写真3)。このように飲食は年齢差関係なく誰でも参加でき、会話を軸とした多世代交流を生む活動であった。

(4) 振舞

振舞では、食材や飲み物など、様々な食べ物を持ち寄り、他の参加者に振る舞う様子がみられた。振る舞われたものをきっかけに会話が盛り上がり、年齢差関係なく、楽しむ様子もみられた。屋台を囲んで談笑する様子や、元家具職人による、カンナがけのレクチャーが行われた(写真4)。また、屋台での販売や共食を通じたコミュニケーションの様子も見られた(写真5)。このように、振舞はスキルの伝達や多世代交流を生むきっかけとなる活動であった。

(5) 工作

工作では、レイズドベッド制作やベンチづくりを行っ

た。工具の使い方や上手くビスを入れるコツを知っている参加者がおり、他の参加者に教えるなどの交流がみられた(写真6)。また、親子で協力しながらベンチを組み立てる様子がみられた。このように、工作は誰でも取り組めることができ、かつスキルの伝達に適した多世代交流を生む活動であった。

5. まとめ

本稿では、ARによる「よしひさえん」の実践について観察調査から得られた知見について報告した。実践結果として、園芸、調理、飲食、工作は子どもでも参加でき、特に、園芸、工作は、スキルの伝達によって、多世代交流が促進されることが推察された。また、「食」の活動は年齢差関係なく、会話を生みやすく多世代ネットワーク形成のきっかけになる可能性があると考えられる。次稿ではアンケートおよびヒアリング調査から多世代ネットワーク形成への有効性を明らかにする。

注

1) イベントには複数の活動から構成されるものもある。

参考文献

1) 山田真大, 森永良丙, 武藤真守: コミュニティガーデンの活動・交流実態-コミュニティガーデンにおける地域の交流の場としての有効性に関する研究 その2-, 日本建築学会学術講演梗概集, pp.325-326, 2012

2) 有本梓, 伊藤絵梨子, 白谷佳恵, 田高悦子: アクションリサーチによる地区組織基盤の世代間交流プログラムの開発と評価, 日本地域看護学会誌, 23, 2, pp.21-32, 2020

3) 田所承己: コミュニティカフェとパーソナル・ネットワーク-利用者を対象とする質問紙調査データの分析-, 帝京社会学, 29, pp.113-143, 2016

4) 高岡市教育委員会: 伝統的建造物群保存対策調査報告書(再調査編), 2020

5) 木下勇: ワークショップ 住民主体のまちづくりへの方法論, 学芸出版社, 2007



写真1 園芸の活動風景



写真2 調理の活動風景



写真3 飲食の活動風景



写真4 振舞の活動風景1



写真5 振舞の活動風景2



写真6 工作の活動風景

*1 富山大学芸術文化学部 学部生

*2 富山大学人文社会芸術総合研究科 大学院生

*3 富山大学学術研究部芸術文化学系 講師

*4 公益財団法人金沢芸術創造財団

*5 株式会社ホリエ (シエルホームデザイン)

*6 江寄建築

*1 Undergraduate, School of Art and Design, University of Toyama

*2 Students, Graduate School of Humanities, Arts, and Social Sciences, University of Toyama

*3 Lecturer, Faculty of Art and Design, University of Toyama

*4 Kanazawa Art Promotion and Development Foundation

*5 Horie Corporation (ciel HOME DESIGN)

*6 Ezakichenchiku